



主役は君たち、高校生（その2）

（前号からの続き）

学校は管理統制を強めます。生徒会の自治はもがれ、実力行使を伴う運動は衰えた。代わって、無気力、無関心、無責任の“三無主義”の空気に覆われていった。

六七年に70%近くあった総選挙での二十代の投票率は、二年前は33%足らずでした。全世代で下落傾向にあるものの、破格の急降下ぶり。民主主義の維持に欠かせない問いを立てる人、意見のある人は育っていないのでしょうか。

実は、先生たちも萎縮気味のようなのです。授業の公正中立を求められ、生々しい政治問題は扱いにくいからです。四十年近く東京都立高校に勤めた元社会科教員の安達三子男（みねお）さん（67）は語ります。

「広島を訪問するオバマ米大統領が謝罪しないのはなぜか。それじゃ、安倍首相はパールハーバーを訪問して謝罪するべきか。そんな議論にこそ意味があるのに、難しいかもしれません。政治的中立性というのは、現状追認と同じことです」

十八歳選挙権の実現を前に、文部科学省は四十六年ぶりに、校外に限り政治活動を認めました。ところが、紛争のトラウマ（心的外傷）からか、学校への届け出を課すこともできると言い出した。

愛媛県の高校のように、校則で事前の届け出を定める動きが早速現れた。暴力に巻き込まれないよう、学業がおろそかにならないよう見守るという建前です。

◆問いを立てて熟議を

でも、それでは生徒たちの思想を調べ、監視するに等しい。就職や進学に不利にならない

いかと困惑して、政治への関心を失えば、主権者教育の理念とも矛盾する。

制限そのものが憲法や子どもの権利条約に反し、人権を損ねているとの声も大きくなっています。自ら問いを立て、仲間や親たちと熟議をし、考えを表明すべき重大な問題ではないでしょうか。

主役は君たち高校生。その力こそが民主主義を鍛えるのです。

*

次の参議院選挙から18歳に投票権が与えられる。例えば、現政権下で、君たちの将来の社会保障の基盤とはるはずの消費税増税が見送られたが、そのことの是非は投票する際の一つの判断のポイントになるだろう。これは、目の前の、つまり現在の大人たちの生活を守るための措置であるが、将来の、つまり君たちの生活に関する見通しが十分に考慮されたのかどうかは疑わしい。一方で、君たちは大人たちを保護者としているわけだから、大人たちの生活の安定は、君たちの生活の安定とも結びつく。簡単に是非を判断できることではないのである。さらに、そもそも将来の財源を消費税から確保するという前提が正しいことなのかも問題だろう…。

目の前の課題である日常の学習に邁進しながらも、ちょっと余裕がある時には、日々伝えられるニュースにも注意して、現在の課題と向き合う時間も持ちたいものである。そういうことが、学校で学んだ知識を結びつけ、本当の学力となって将来の君たちを支えてくれるのだろうし、同時に、「民主主義を鍛える」ことにもつながっていくに違いない。